

誰かに教えたくなる 科学技術の話 63

日本にも存在する
「科学の奇才」



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

作家のS・モームに「世間には奇妙なことをする奇妙な人間が多数いる」という言葉がある。とりわけ科学の研究、技術の開発、事業の創設など新規の分野に挑戦する人々には、そのような傾向がある。昨年十一月号で外国の科学の奇才を紹介したところ、何人かの読者の方々から興味があったという投書をいただいたので、今回は五名の日本の科学の奇才を紹介したい。

平賀源内

作家には筆名、画家には雅号など、本名以外の名前を使用する人々は存在するが、生涯に「元内」「国倫」「子彝」「鳩溪」「李山」「風来山人」「福内鬼外」「天竺浪人」「貧家銭内」など多数の名前を使用して活躍した風変わりな人物がいる。名前だけではなく、職業も画家、俳人、作家、本草学者、発明技師、開発業者など多彩であり、一般には平賀源内という名前で有名な江戸時代中期の学者である。

一七二八年に讃岐高松藩の武士の家庭に誕生し、若年の時期から発明の才能があり、歩数で距離を測定する「量程器」、二点の高低を計測する「平線儀」を開発しているし、事業にも能力を発揮し、三

十四歳で現在の通信販売に相当する全国各地の産品を流通させる「東都薬品会」を江戸で開催し、そこに出品される産品を図入りで紹介する冊子「物類品隴」まで発刊している。

故郷では李山という俳号で俳句の研鑽をするが、江戸へ移動して風来山人という筆名で『風流志道軒傳』という戯作を発表し「江戸戯作の開祖」、福内鬼外という筆名で浄瑠璃『神靈矢口渡』を発表し「江戸浄瑠璃の開祖」とされる。さら



平賀源内 (1728-80)

に長崎経由でオランダから伝来した油絵にも挑戦して『西洋婦人図』を描写し、日本の西洋絵画の草分けになり、文筆と絵筆の両方で才能を発揮した。

しかし一七七九年に、ある大名から依頼された別荘の普請について町人と紛争となり、二人を殺傷してしまい入牢となり、翌年、獄中で病死した。友人であった杉田玄白（オランダの医書『ターヘル・アナトミア』を『解体新書』として翻訳行した一人）は墓碑に「非常ノ人ノ非常ノ事ヲ好ミノ行ヒ是レ非常ノ何ゾ非常ニ死スルヤ」と追悼している。時代が変化した時期の奇才であった。

麻田剛立

古代から地球は宇宙の中心にあり、すべての星々は地球の周囲を周回しているという天動説が流布していた。十七世紀初頭になり、ドイツの天文学者J・ケプラーが地球も無数の星々の一個で宇宙を移動しているという地動説を発表したが、キリスト教会が反対し、社会に浸透するのに時間がかかった。ところが西欧社会から孤立していた十八世紀の日本で独自に地動説を発表した学者が存在した。



麻田剛立 (1734-99)

『大分県先哲叢書麻田剛立 普及版』表紙絵
(大分県立先哲史料館提供)

豊後国杵築藩の儒者の綾部綱斎の四男の剛立（幼名は妥彰）は子供時代から天体観測に熱中したが、父親が生活のために医学を勉強させた結果、藩主の侍医になる。しかし天体観測が十分にできないという理由で脱藩したため、父親は塾居閉門になってしまったが、本人は大坂の船場に移住し、医院を開業するとともに「天文星曆学麻田流」の看板を掲載して希望した生活を開始する。

しかし「宇宙の運行に比較すれば、人

間の一生は一瞬でしかない」との信念で医者稼業には熱心ではなく、生活に困窮するが、周囲の廻船問屋が航海に天体観測の知識が必要のため援助をしてくれたおかげで、天文研究に集中することができた。その成果の一例は官製の曆表には記載されていなかった宝曆一三（一七六三）年九月一日の日蝕を予言したことで、一躍有名になった。

さらに麻田が世間を驚嘆させたのは明和六（一七六九）年に発表した地動説である。ケプラーの発表から一六〇年近く経過していたが、当時、渡来していた宣教師達は地動説を異端としていた旧教の人間であったため、日本に情報は到来せず、麻田の弟子であった山片蟠桃でさえ「三歳の子供でも嘲笑する」と著書に記載しているほどの予言であったが、市井の偉大な天文学者であった。

南方熊楠

イギリスで一八六九年に創刊された『ネイチャー』という科学雑誌に論文が掲載されることは、現在でも大変な業績として評価されるが、一八九三年という明治時代の初期に「極東の星座」という論文を英語で発表し、以後、生涯に五十



南方熊楠 (1867-1941)

一もの論文を『ネイチャー』に発表した日本の学者が存在する。明治時代になる直前の一八六七年に和歌山城の北側にある商家に誕生した南方熊楠である。

子供時代から抜群の記憶能力があり、近所の商家が所蔵する『和漢三才図会』『本草綱目』などの貴重図書を閲覧させてもらっては内容を記憶し、自宅で複製を作成する異才で、一〇五巻からなる『和漢三才図会』などは五年かけて複製を完成させている。十九歳でアメリカへ留学するが、二十五歳でロンドンに移動

し、大英博物館で毎日のように勉強して論文を執筆し、一九〇〇年に帰国した。

和歌山県南部の田辺に居住して植物採集などをしていたが、下帯一丁の丸裸で山野に出掛けるので、田植えをしている女性などが天狗と間違えて大騒ぎになったこともあった。明治政府が遂行しようとした各地の神社を統合する神社合祀政策には猛烈な反対運動を実行して阻止した結果、神社周辺の森林が保全され、日本の環境保護運動の元祖とされている。

南方は粘菌の研究にも熱心で海外から注目されていたが、やはり粘菌を研究されていた昭和天皇が戦前に行幸されたとき、田辺の沖合の神島を案内することになった。無位無官の人間による日本最初の御前進講である。フロックコートに正装したものの、採集した粘菌をキャラメルおかしの空箱に梱包して進呈するという面目躍如の行動であった。学問において位階は関係ないという清々しい逸話である。

岡潔

一九五一年に岡潔という学者が「多変数解析関数に関する研究」で日本学士院賞を受賞した。当時は五十歳で奈良女子大学理家政学部教授であったが、物置を

改造した六畳一間の小屋に五人家族で生活しており、受賞通知のあった当日の夕食は七輪で焼いたトーストであった。受賞の感想を質問され「イモをつくる研究が一番つらかった」というほどの状況であった。

岡は若手の時代から天才であり、京都帝国大学で講師、助教授と昇進し、二十九歳でフランスに留学、そこで多変数複素関数論を研究課題にする。帰国して広島文理科大学助教に就任するが、病気で退任して郷里に戻り、暗闇にした部



岡潔 (1901-78)

屋で数学の問題を研究していた。散歩をしている最中でも、道路に数式を記載して時間の経過にも気付かず、ひたすら計算をするような人間であった。

一九四九年に奈良女子大学教授になるが、ヨレヨレの背広とワイシャツでネクタイはなし、いつも雨靴であった。一九六〇年に文化勲章を受章するが、文部省は奈良女子大学に連絡して受章してくれぬかを確認しているほどであった。本人は「これで定年になってもアルバイトをしなくて生活できようらしい」という感想とともに、生涯に一度だけの革靴着用で皇居での式典に出席した。

文化勲章を受章して有名になってからは『春宵十話』や『春風夏雨』のような題名の一般対象の書物を出版し、西欧の理性主義、合理主義、物質主義、共産主義などの影響により、日本民族や日本文化は汚染されているという見解を表明し、晩年に京都産業大学教授に就任したときには「日本民族」という科目を講義している。

朝永振一郎

文化勲章を受章した岡潔も奇人であったが、ノーベル物理学賞を受賞した奇人



朝永振一郎 (1906-79)

も存在する。一九六五年にノーベル物理学賞を受賞したR・P・ファインマンは『冗談でしょう、ファインマンさん』という書籍があるほどの人物で、小便が重力によって放出されるかが議論になったとき、自身が逆立ちして小便をし、重力には関係ないことを実証したという逸話をはじめ、数多くの愉快な話題がある。

ファインマンと同時に受賞した日本の物理学者朝永振一郎も逸話が豊富な学者である。大佛次郎と対談したとき、大佛

が同席した芸者の武原はんの俳句を紹介したのに対抗し、俳句には上手下手はないと「立ち小便／よくぞ男に／生まれけり」という俳句(?)を披露し、周囲を哑然とさせたという逸話がある。それにもかかわらず、没後には著書に大佛次郎賞が贈呈されている。

大変な酒豪でもあり、ノーベル物理学賞の受賞が決定したときには多数の人々から御祝いの酒類が到来した。そこで自宅で何度も祝杯をあげていたところ、風呂で転倒して肋骨を六本も骨折し、ストックホルムでのノーベル賞授賞式に出席できなくなってしまった。もともと堅苦しい儀式には出席したくなかったので「これぞ怪我の功名」と嬉々として欠席したとされている。

戦前に量子力学の基礎を構築してノーベル物理学賞を受賞していたW・K・ハイゼンベルクの研究施設に留学していた経験からドイツ語は自由自在であったため、酩酊すると自作の落語をドイツ語で披露しており、戦後、アメリカのプリンストン高等研究所に滞在して帰国したとき、どのような仕事をしてきたかと質問され「歯をすべて治療してきた」と返答したという落語のような逸話もある。